

業績一覧

(2017年6月22日現在)

1. 単著・編著

- 1) 竹中千春 企画編集『地域研究 第15巻1号 グローバル・アジアにみる市民社会と国家の間 危機とその克服』(京都大学地域研究統合情報センター、2015年4月)
- 2) 竹中千春 監修『平和を考えよう (2) 教室も外国も世界はひとつ』(あかね書房、2013年3月)
- 3) 竹中千春 監修『平和を考えよう (1) 戦争の怖さを感じとる力を』(あかね書房、2013年3月)
- 4) 竹中千春『千春先生の平和授業/2011~2012/未来は子どもたちがつくる』(朝日学生新聞社、2012年10月6日)
- 5) 竹中千春『盗賊のインド史——帝国・国家・^{アウトロー}無法者』(有志舎、2010年10月)
- 6) 竹中千春・高橋伸夫・山本信人編『講座現代アジア研究第2巻 市民社会』(アジア政経学会監修、慶應義塾大学出版会、2008年)
- 7) 竹中千春責任編集『国際政治 149号 周縁からの国際政治』(日本国際政治学会、2007年11月)
- 8) 『世界はなぜ仲良くできないの？暴力の連鎖を解くために』(阪急コミュニケーションズ、2004年)
- 9) Chiharu Takenaka ed., *What is to be Written? Setting the Agendas for Studies of History*(Institute for International Studies, Meiji Gakuin University, March 2004)
- 10) Chiharu Takenaka ed., *Can We Write History?: Between Postmodernism and Coarse Nationalism* (Institute for International Studies, Meiji Gakuin University, March 2003)

2. 論文

- 1) 「権力移行期の世界と日印関係の創造的可能性」堀本武功編『現代日印関係入門』(東京大学出版会、2017年)、285-309頁。
- 2) 「地域研究は国境を越えるか—二一世紀のアジア研究」『地域研究』15巻1号(京都大学地域研究統合情報センター、2015年4月)、8-16頁。
- 3) 「境界を越えるアジア研究」『アジア研究』59巻3・4号(アジア政経学会、2014年9月)、1-5頁。
- 4) 「A Milestone for the Japan Association for Asian Studies (JAAS)」『アジア研究』59巻3・4号(アジア政経学会、2014年9月)、6-8頁。

- 5) 「平和の主体論—サバルタンとジェンダーの視点から」日本平和学会編『平和研究 42号 平和の主体論』(早稲田大学出版部、2014年)、1-18頁。
- 6) 「インド新政権の国家戦略を占う」電子雑誌「e-World Premium (イー・ワールド・プレミアム)」5号(時事通信社、2014年5月)、http://janet.jw.jiji.com/images/janet/e-World_pdf/NP_e-worldvol5.pdf
- 7) 「インド民主主義のダイナミクス—グローバル大国と草の根社会の間」『世界経済週報』第194号(2012年6月30日)、11-22頁。
- 8) 「ジェンダー、暴力、暴力の克服—プーラン・デーヴィーとその時代—」『現代インド研究』第2号(2011年)、79-100頁。
- 9) 「人権とジェンダー」大芝亮・藤原帰一・山田哲也『平和構築・入門』(有斐閣、2011年)、第13章、190~212頁。
- 10) 「南アジアにおけるジェンダーと政治—インド民主主義のジェンダー・ダイナミクス—」『ジェンダーと比較政治学』(日本比較政治学会年報、2011年)、195-227
- 11) 「民主主義が動かす外交—インド対外政策の構図」『現代インド・フォーラム』第2号(2010年10月)、<http://www.japan-india.com/>、pp.19-25.
- 12) 「国際政治のジェンダー・ダイナミクス—戦争・民主化・女性解放」『国際政治』161号(特集:ジェンダーの国際政治、日本国際政治学会、2010年)、11-25頁。
- 13) 「多国間主義とインド外交—核保有と経済成長」大矢根聡編『東アジアの国際関係—多国間主義の地平』(有信堂高文社、2009年12月)、pp. 97-122.
- 14) 「総選挙後のインド政治—諦めない民衆」『現代インド・フォーラム』第2号(2009年7月)、<http://www.japan-india.com/>、pp.11-18.
- 15) 「グローバルな国民国家の時代?—問題提起」『アジア研究』第55巻第2号(2009年4月)、3-9頁。
- 16) 「盗賊のインド史—近代国家の周縁(一)(二)」『立教法学』76・77号(2009年)
- 17) 「アジアの市民社会」、竹中千春・高橋伸夫・山本信人編『講座現代アジア研究第2巻 市民社会』(アジア政経学会監修、慶應義塾大学出版会、2008年刊行予定)、第1章、9-34頁。
- 18) 「マハートマ=ガンディー—非暴力と国民の思想」、草光俊雄・五味文彦・杉森哲也『歴史と人間』(放送大学出版協会、2008年、第14章、pp. 203-219.
- 19) 「国家とナショナリズム」、国分良成・酒井啓子・遠藤貢編『日本の国際政治学 第3巻 地域か

- ら見た国際政治』（有斐閣、2008年）、第1章、pp.21-40.
- 20) 「序章 周縁からの国際政治」、竹中千春責任編集『国際政治』149号（特集：周縁からの国際政治、日本国際政治学会、2007年11月）、1-14頁。
 - 21) 「平和構築とジェンダー」大芝亮・藤原帰一・山田哲也編『平和政策』（有斐閣、2006年）、305-332頁。
 - 22) 「インド——貧しさと民主主義の競合」『アジアの政治経済』（有斐閣、2006年、第12章）、253-275頁。
 - 23) “Would Democracy Promote Human Security?”, OBIYA Chika and KUROKI Hidemitsu eds., *Political Violence and Human Security in the Post-9.11 World: State, Nation and Ethnic Relations IX* [JCAS Symposium Series no.24] (Osaka: The Japan Center for Area Studies, National Museum of Ethnology, 2006), pp. 233-247.
 - 24) “Politics of Demography in India”、『国際学研究』（明治学院大学論叢）第28・29合併号（2006年3月）、pp. 95-107.
 - 25) 「対テロ戦争とアジアの市民社会——暴力の連鎖を解くのは誰か？」南山大学社会倫理研究所編『社会と倫理』第18号(2005年7月)、19-40頁。
 - 26) 「グローバリゼーションと民主主義の間——インド政治の現在」『国際問題』（2005年5月）、7-23頁。
 - 27) 「女の平和——犠牲者から変革の主体へ」『講座 戦争と現代 第5巻 平和秩序形成の課題』（大月書店、2004年）、317-362頁。
 - 28) 「近代インドにおける国家と宗教の相剋——ガンディー現象とは何だったのか」『東洋学術研究』第43巻第1号（2004年6月）、180-200頁。
 - 29) 「ジェンダー化する政治——近代インドにおける国家・法・女性」『政治学年報2003 「性」と政治』（岩波書店、2003年）、45-71頁。
 - 30) 「インドという理念——民族共存の実験」『国際学研究』第23号（明治学院大学、2003年3月）、39-50頁。
 - 31) 「女性と民主主義——現代インドの実験」高島通敏編『現代市民政治論』（世織書房、2003年）、217-244頁。
 - 32) 「ジェンダー研究と南アジア」長崎暢子編『現代南アジア—①地域研究への招待』（東京大学出版会、2002年）、237-255頁。
 - 33) 「サティ論——スピヴァク『サバルタンは語るができるか』をどう読むか」 神奈川大学評論編集専門委員会編『ポストコロニアルと非西欧世界』（御茶の水書房、2002年）、311-348頁。
 - 34) 「武力紛争とジェンダー——国際政治の中の南アジア」日本国際政治学会編『国際政治』第130号

- (2002年5月)、192-201頁。
- 35) 「カシミール——边境から国境へ」『アジア研究』第47巻第4号(2001年10月)、23-38頁。
 - 36) 「暴動の政治過程——1992-93年ボンベイ暴動」日本比較政治学会編『民族共存の条件』(早稲田大学出版会、2001年)、49-78頁。
 - 37) 'Parties in Transition: Japan and India in Comparative Perspective', Subhash C. Kashyap, D.D.Khanna and Gert W. Kueck eds., *Reviewing the Constitution* (Delhi: SHIPRA Publications, 2000), pp. 290-295.
 - 38) 「世界政治をジェンダー化する」小林誠・遠藤誠治編『グローバル・ポリティクス』(有信堂、2000年)、218-236頁。
 - 39) 「ガンディー——民衆の神、国民の父」『国際学研究』第19号(明治学院大学論叢、2000年3月)、1-17頁
 - 40) 'Writing Gandhi: Nobuko Nagasaki, *Gandhi: An Experiment in Anti-Modernity* (Tokyo: Iwanami Shoten, 1996)', *Journal of the Japanese Association for South Asian Studies*, no.11(October 1999), pp.137-149.
 - 41) 「政党再編とインド政治」『国際問題』第469号(国際問題研究所、1999年4月)、34-48頁。
 - 42) 'On the Edges of the State Formation: Decolonization and Kashmir, 1946-47', a paper presented to the Workshop on Nation-Building and Development Planning in South Asia, at the University of Tokyo, Nov. 6-7, 1998.
 - 43) 「植民地国家と国民国家——英領インドの事例に照らして」『国際学研究』第16号(明治学院論叢、1997年3月)、165-173頁。
 - 44) "Colonial Parliamentarism and Passive Revolution in India", paper presented to the 49th Meeting of the Association for Asian Studies (March 14, 1997, Chicago, USA)
 - 45) 「ナショナリズム・セキュラリズム・ジェンダー——現代インド政治の危機」、押川文子編『南アジアの社会変容と女性』(アジア経済研究所、1997年1月)、191-221頁。
 - 46) 「ジェンダー・宗教・政治——現代インドにおけるヒンドゥー・ムスリム対立に参照して」『創文』368号(1995年8月)、6-8頁。
 - 47) 「『暴力について』再考——非暴力主義の現代的意義」、坂本義和編『世界政治の構造変動 第3巻 発展』(岩波書店、1994年12月)、193-223頁。
 - 48) 「比較政治学と歴史学における『インド像』——『オリエンタリズム』論に参照しながら」、岩波講座『社会科学の方法 第IX巻 歴史への問い・歴史からの問い』(岩波書店、1993年12月)、145-178頁。
 - 49) 「イギリスと大英帝国における国家と社会」『創文』318号(1991年1月)、7-11頁。

- 50) 「1990年代へむけて——政治変革と『女性』」『軍縮問題資料』第112号（宇都宮軍縮研究室、1990年3月）、39-44頁。
- 51) "'Constitution' and 'Constitutionalism' in Colonial India 1916-1935', paper presented to the Seminar on Indian History, the Department of History, the University of Delhi (Feb. 23, 1989)
- 52) 「大英帝国の解体——『パレスティナ問題』、1945-1947年」、犬童一男・山口定・馬場康雄・高橋進編『戦後デモクラシーの成立』（岩波書店、1988年）、223-286頁。
- 53) 'Peace, Democracy and Women in Postwar Japan', *Peace and Change: A Journal of Peace Research*, vol.XII no.3/4(1987), pp.69-77.
- 54) 「『権力移譲』への政治過程——大英帝国と英領インドの非植民地化（一）」『東洋文化研究所紀要』第101冊（1986年）、73-162頁。
- 55) 「逗子・1984年——『平和』と『女性』の視角から」『平和研究』第10号（1985年）、158-169頁。
- 56) 「植民地国家における体制と危機——インド・ナショナリズムの位相、1916-1935年」（東京大学法学部提出助手論文、1983年2月）

2. 小文

- 1) 「追悼文 坂本義和先生の思い出」『PRIME』38号（明治学院大学国際平和研究所、2015年3月）、125-127頁。
- 2) 連載「千春先生の平和授業」『朝日小学生新聞』（2011年1月4日、1月15日より毎週土曜日）
- 3) 「インドの民主主義——「対決」から「利益」へ移行」『高知新聞』（2009年5月20日）
- 4) 「マルチラテラルな国際社会の中のインド」『外交フォーラム』（2006年12月号）
- 5) 「国際政治学とジェンダー（シリーズ企画II学問領域とジェンダー）」『ジェンダー史学』第2号（2006年）、85-88頁。
- 6) 「豊かな外交関係を築くために——インド型民主主義を理解する」『外交フォーラム』218号（2006年9月号）、34-38頁。
- 7) 「独立から60年 開発と統合に苦闘した歴史」「軍政・独裁を避け60年間民主主義を維持できた秘密」「再燃した反イスラム暴動に潜む不安心理」『エコノミスト』（臨時増刊「まるごとインド」）（2006年4月10日号）、90-99頁。
- 8) 「米国同時中枢テロから5年」（2006年9月16日）「テロの時代を生きる」（2006年7月17日）「イ

ンドから日本を問う」(2005年12月19日)「一人ひとりの戦争史」(2005年6月20日)「予想されない出来事」(2005年4月25日)「次世代を信用しよう」(2005年2月28日)ほか、神奈川新聞「辛口時評」担当(2005年1月—現在、2ヶ月ごとに担当)

- 9) 「パキスタン地震・地球市民の互助力試す時」『朝日新聞』(2005年10月22日)
- 10) 「暴力の連鎖を止める鍵をもとめて」岩波書店編集部編『いま、この研究がおもしろい』(岩波ジュニア新書、岩波書店、2005年)、21-40頁。
- 11) 「新聞の存在意義」『神奈川新聞』(2004年10月15日)
- 12) 「カシミール問題」『PRIME』第17号(2003年3月)
- 13) 「女たちの平和は国境を越える」『女たちの21世紀』第33号(2003年1月)
- 14) 「ジェンダーと平和」『平和学がわかる。』AERA Mook 第83号(2002年9月)
- 15) 「印パ 緊張は緩和したか」『世界』第704号(2002年8月)
- 16) 「イギリス」『史学雑誌』第111編第5号(2002年5月)
- 17) 「印パ戦争は回避できるか」『世界』第699号(2002年3月)
- 18) 「非暴力の価値、今こそ——ラジモハン・ガンディー氏に聞く」『朝日新聞』(2001年11月30日)
- 19) 「暴力の連鎖を断ち切れ」『朝日新聞』(2001年9月15日)
- 20) 「インドはなぜ核実験を行ったか」明治学院大学国際学付属研究所『研究所年報』第2号(1999年12月)
- 21) 「ガンジー、ネルーから遠ざかるインド——核配備、ヒンドゥー化、愛国主義的宣伝」『読売新聞』(1999年10月14日夕刊)
- 22) 「「創造された伝統」としての「女らしさ」」『重点領域オケージョナル・ペーパー』第3号(1999年9月)
- 23) 「核実験後の南アジアの平和」『PRIME』第10号(1999年3月)
- 24) 「戦争と原爆の「記憶」——インドの反核運動と「ヒロシマ・ナガサキ」」『長崎平和研究』(1998年10月号)
- 25) 「核保有と右傾化の道を進むインド」『オルタ』(1998年11月号)
- 26) 「反核運動は印パ情勢を変えられるか」『世界』第653号(1998年10月号)
- 27) 「インド人民党はなぜ核保有に踏み切ったか」『世界』(1998年7月号)
- 28) 「インド・パキスタン核実験——「冷戦後」の核と平和」『オルタ』(1998年7月号)

29) 「ラジブ・ガンジー元首相暗殺——南アジア揺るがすインドの混乱」『朝日ジャーナル』（1991年6月7日）

3. 書評・文献解題

1) 書評、広瀬崇子・南埜猛・井上恭子編著『インド民主主義の変容』『南アジア研究』21号（日本南アジア学会、2009年12月）、210-215頁。

2) 書評、内藤雅雄・中村平治編『南アジアの歴史』『世界の労働』57巻3号（日本ILO協会、2007年3月）、62-65頁。

3) 書評、堀本武功・広瀬崇子編『現代南アジア3民主主義へのとりくみ』『南アジア研究』16号（日本南アジア学会、2004年10月）、176-182頁。

4) 書評、K・M・パニッカル『西洋の支配とアジア、1498-1945年』（左久梓訳、藤原書店、2000年）『週間読書人』（2001年2月9日）

5) 書評、James C. Scott, *Dominance and the Arts of Resistance: Hidden Transcripts* (New Haven: Yale University Press, 1990) 『国家学会雑誌』第113巻第3・4巻（2000年4月）、207-9頁。

6) 書評、D. Kandiyoti ed., *Women, Islam and the State* (London: Macmillan, 1991) 『平和研究』第19号（1995年6月）、115-116頁。

7) 書評、V.M.Hewitt, *The International Politics of South Asia* (Manchester & New York: Manchester U.P., 1992) 『アジア経済』第36巻第1号（1995年1月）、80-83頁。

8) 書評、加藤典洋『日本という身体——「大・新・高」の精神史』（講談社、1994年）『国際学研究』第13号（明治学院論叢、第531号、1995年1月）、79-84頁。

9) 文献解題「第3章 政治とジェンダー： インドを中心に」、押川文子編『南アジアの女性研究——研究動向と基礎文献解題』（アジア経済研究所、所内資料、地域研究部No. 6-1、1994年11月）、41-60頁。

10) 書評、合意形成研究会『カオスの時代の合意学』（創文社、1994年）『創文』357号（1994年8月）、7-10頁。

11) 書評、マーガレット・H・ベイコン『フェミニズムの女たち』（岩田澄江訳、未来社）『エコノミスト』（1994年4月19日号）、101-102頁。

12) 書評、原ひろ子・大沢真理編著『変容する男性社会——労働・ジェンダーの日独比較』（新曜社）『エコノミスト』（1993年11月16日号）、122-123頁。

13) 書評、エリザベス・ビューミラー『100人の息子がほしい——インドの女の物語』（高橋光子訳、

未来社) 『エコノミスト』 (1993年7月6日号)、102-103頁。

- 14) 書評、長崎暢子『インド独立——逆光の中のチャンドラ・ボース』(朝日新聞社) 『歴史と地理』第417号(山川出版社、1990年5月)、36-43頁。
- 15) 「1989年の歴史学界——回顧と展望、南アジア(近現代)」 『史学雑誌』第99編第5号(1990年5月)
- 16) 書評、坂井秀夫『イギリス・インド統治終焉史、1910-47年』 『南アジア研究』 第1号(1989年10月)、140-142頁。
- 17) 書評、T・スコッチポル『国家と革命』(Skocpol, Theda, *States and Social Revolutions: A Comparative Analysis of France, Russia and China* (Cambridge: Cambridge University Press, 1979) 『国家学会雑誌』第98巻11・12号(1985年)、185-188頁。
- 18) 書評、アムルート・W・ナークレー『非暴力行動の社会心理——三つのサッティヤグラハの研究』 『国際政治』第76号(1984年)、186-189頁。

4. 翻訳

- 1) ラナジット・グハ著、竹中千春訳 『世界史の脱構築——ヘーゲルの歴史哲学批判からタゴールの詩の思想へ』(立教大学出版会、2017年3月)
- 2) アシース・ナンディ「インド大暴動 進む心の分離——グジャラート州の民族浄化」 『世界』、第703号(2002年7月)
- 3) アチン・ヴァナイク「核実験後一年、カシミール紛争後の南アジア」、 『技術と人間』(1999年10月号)、15-24頁。
- 4) アシース・ナンディ「核時代を超えて——「未来のない」未来」、坂本義和編『核と人間』第2巻(岩波書店、1999年8月)、257-294頁。
- 5) ラナジット・グハ、G・パーンデー、P・チャタジー、G・スピヴァック『サバルタンの歴史——インド史の脱構築』(岩波書店、1998年11月)
- 6) パルタ・チャタジー「インド人はなぜ核爆弾を愛したか。そしてすぐに後悔したか」 『みすず』第449号(1998年8月号)、2-13頁。
- 7) ラージニー・コターリー「印パから新たな反核運動を」 『世界』第651号(1998年8月号)、34-37頁。